

# 第3回 植田久男書展 記録集



会期：平成 18 年 8 月 1 日（火）～8 月 6 日（日）

会場：常陸大宮 緑隠 雪村庵

ご来場の皆様へ

猛暑の中、また遠路ご来場いただき、誠にありがとうございます。

愛と励ましのテーマに添った詩と自作の独り言など拙い書作品ですが、ご高覧賜れば幸甚に存じます。

まだまだ発展途上の身の上ゆえ、お気づきの点などご指摘ご鞭撻頂けれることが、個展開催の何よりも貴重な賜りものと思っております。

緑豊かな田園風景と中国茶もご賞味いただきながら、ゆっくりとしたひと時を楽しみいただきたいと存じます。

平成十八年八月 第三回書展開催にて

植田 久男（愚海）

東海村書道連盟所属



「掬う」=すくう

人の側身形

からだをかがめてものを受けとめるような形

「救う」でも「助ける」でもない、

神さまか仏さまが天から掬い上げられるような

イメージを持って書きました。

はじめに

平成十七年二月に第二回展を開催。それから一年半後の第三回展開催の経緯などを紹介させていただきます。

今回会場となりました緑隠・雪村庵(りよくいん・せつそんあん)を知ったのは、平成十七年十月に尊敬する山口先生夫妻の第十六回ふふ展開催のお手伝いで来庵したのがきっかけでした。

ご夫妻展は、民家風ギャラリー内のほか、屋外の庭園にも、さわやかな秋風に豪快な職(のぼり)がたなびかせ、番傘が大輪の花のように咲き、「うごめく書」の素晴らしい書展でありました。

その時、密かにいつかこの緑隠・雪村庵で個展を開きたいと胸に留めたのでした。

翌年二月にオーナーの清宮さんから当初二人展の企画の打診がありました。前回展までの水戸市内のギャラリーでの整理・反省もあり、なにか変わったことかもしれないあと思っていました。

しかし、所詮まだまだ力不足。もっと力を溜めて精神面の充実も図り慎重に作品づくりをやらうとも思っていたので、少々戸惑いもありました。即答できず、躊躇しましたが、「いつできるかわからない、求められたら素直に今ある力量で見てもらえればいいのだ!」とケツコウ安易ながら引き受けることとしました。

その後、二人展から個展に、会期も六月から八月に変更しましたが、やることには変わりなく、作品づくりの日々となりました。結局前日までドタバタやって、またも俄か作りの書展開催となりました。

必要は努力の母とか・・・と言いますが、求められ与えられた道が、開かれた道と感じています。

「行き詰まってこそ 押し開かれる 暗夜の道」

なんともお恥ずかしい限りです。ありのまま、等身大の自分での開催となりました。愛と励ましをテーマに詩と自作の独り言を拙い書につづってみました。

身に余るような励ましのお言葉、厳しいご批評、アドバイスは個展開催の宝物として有難く賜ります。どうぞよろしくご高覧下さい。

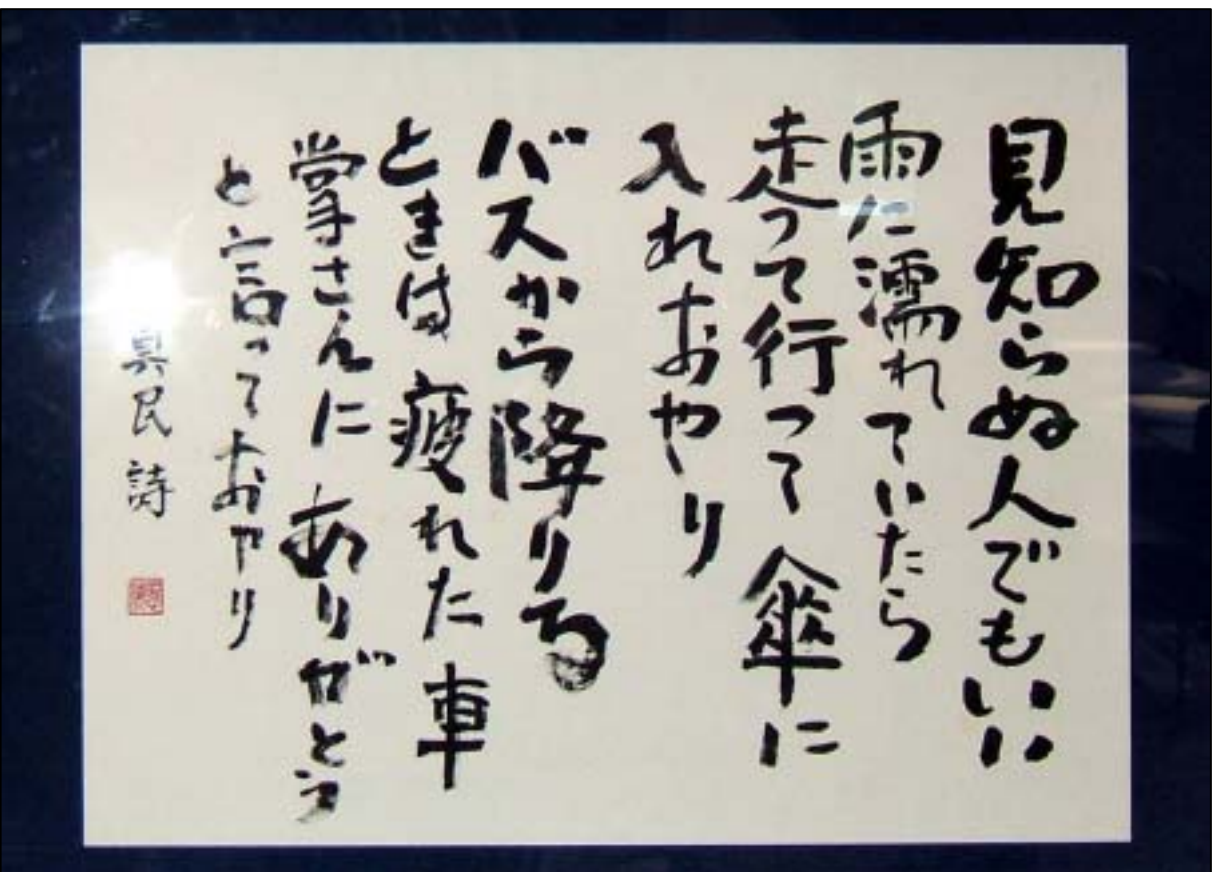


山口歎紅ふふ展 (H17年10月)

坂村真民さんの詩

「念ずれば花ひらく」で親しまれ、穏やかで心温もる詩に惹かれています。観たまま、聴いたままにおれの人生にも、静かに淡々と生きてゆけたら、さぞや苦勞も悩みもないだろうに…と。  
しかし、小生は欲深で小心で、いつもあっちウロウロこっちウロウロです。道草、寄り道、回り道の人生を四十六年もやってきてしまいました。いよいよあとがないなあ。来た道より残る道の方が短いと感じつつあります。せめて、賢人の足跡を辿ることをしながら、世のため、人のためになることを為して、自分の至らなさを施してゆきたいと想っています。

この詩は「小さなおしえ」（自選坂村真民詩集・大東出版社）の一節ですが、ささいな事でいいんだなあ…と、ホッとさせてくれる嬉しい詩です。ふと気づいたらすぐ素直に行動できるのに、一瞬のとまどいでタイミングを失ってしまいます。ごみ一つ捨つことすら、通り過ぎてから悔やむこと、しばしばです。



小さなおしえ

坂村 真民

見知らぬ人でもいい  
雨に濡れていたら  
走って行って

傘に入れておやり

バスから降りるときは  
疲れた車掌さんに  
ありがとうと言っておやり

道ですれちがう  
おばあさんたちには  
ここえであの世での  
幸せを祈っておやり

目の見えない人が歩いていたら  
おっ母さんになつたつもりで  
手をひいておやり

ねがえりもできず  
ねている人があつたら  
こおるぎのように  
そつと片隅で  
愛のうたを  
うたっておやり

小さなことでもいいのです  
あなたの胸のもしびを  
相手の人につつしておやり

## マザー・テレサの瞳

茨木のり子

マザー・テレサの瞳は  
時に 猛禽類のように鋭く怖いようだった  
マザー・テレサの瞳は  
時に やさしさの極北を示してもいた  
二つの異なるものが融けあって  
妖しい光を湛えていた  
静かなる狂とでも呼びたいもの  
静かなる狂なくして  
インドでの徒勞に近い献身が果せただろうか  
マザー・テレサの瞳は  
クリスチャンでもない私のどこかに棲みついで  
じつとこちらを凝視したり  
またたいたりして  
中途半端なやさしさを撃ってくる！

鷹の眼は見抜いた  
日本は貧しい国であると  
慈愛の眼は救いあげた  
垢だらけの瀕死の病人を

なぜこんなことをしてくれるのですか  
あなたを愛しているからですよ  
愛しているという一語の錨のような重たさ  
自分を無にすることができれば  
かくも豊饒なものがなだれこむのか  
さらに無限に豊饒なものを溢れさせることができるのか  
こちらは逆立ちしてもできっこないので呆然となる

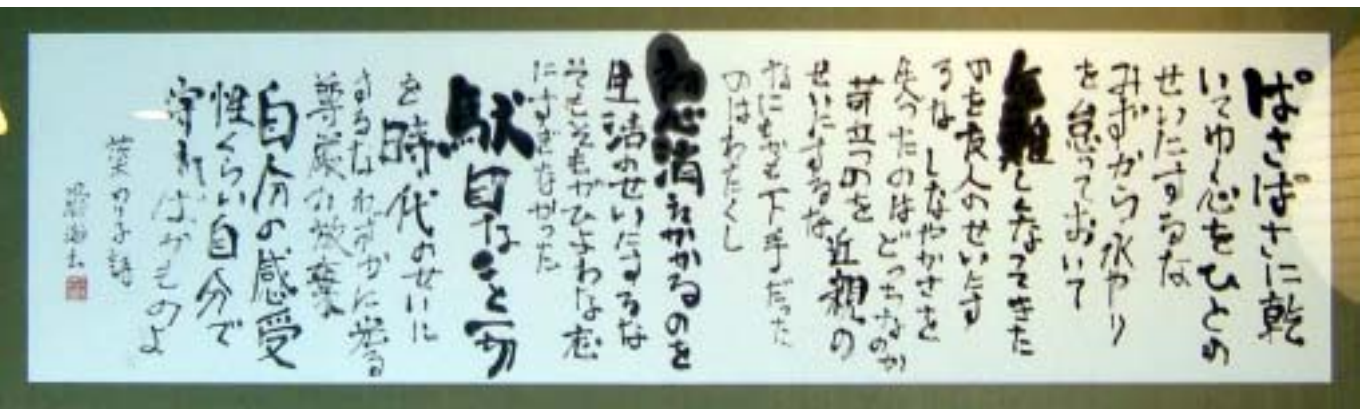
たった二枚のサリートを洗いつつ  
取っかえ引っかえ着て  
顔には深い皺を刻み  
背丈は縮んでしまっただけ  
八十六歳の老女はまたなく美しかった  
二十世紀の逆説を生き抜いた生涯

外科手術の必要な者に  
ただ繻帯を巻いて歩いていただけと批判する人は  
知らないのだ  
瀕死の病人をひたすら撫でさするだけの  
慰藉の意味を  
死にゆくひとのかたわらにただ寄り添って  
手を握りつづけることの意味を

言葉が多すぎます

とって一九九七年 その人は去った





自分の感受性くらい

灰木 のり子

ばさばさに乾いてゆく心を  
 ひとのせいにするな  
 みずから水やりを怠っておいて  
 気難しくなってきたのを  
 友人のせいにするな  
 しなやかさを失ったのはどっちなのか  
 苛立つのを  
 近親のせいにするな  
 なにもかも下手だったのはわたくし  
 初心消えかかるのを  
 生活のせいにするな  
 そもそもが ひよわな志にすぎなかった  
 駄目なことの一切を  
 時代のせいにするな  
 わずかに光る尊厳の放棄  
 自分の感受性くらい  
 自分で守れ  
 ばかものよ

ばかものよ

と茨木さんは自身を叱っておいでなのだが、わたしは、わたしが叱られているように感じる。それを作者はもう阻止することができない。詩とはそういうものである。

わたし自身、歳とともに、だんだん堪え性がなくなってきたのを感じる。それ、もう歳のせいにしていくぞ。

五十年生きれば、その分、世間様のやすりにかけられて忍耐力のバネが磨耗するのは当たり前とつぶつぶく気持ちがある。

若い頃いつも腹を空かしていたから、何でももうまかった。

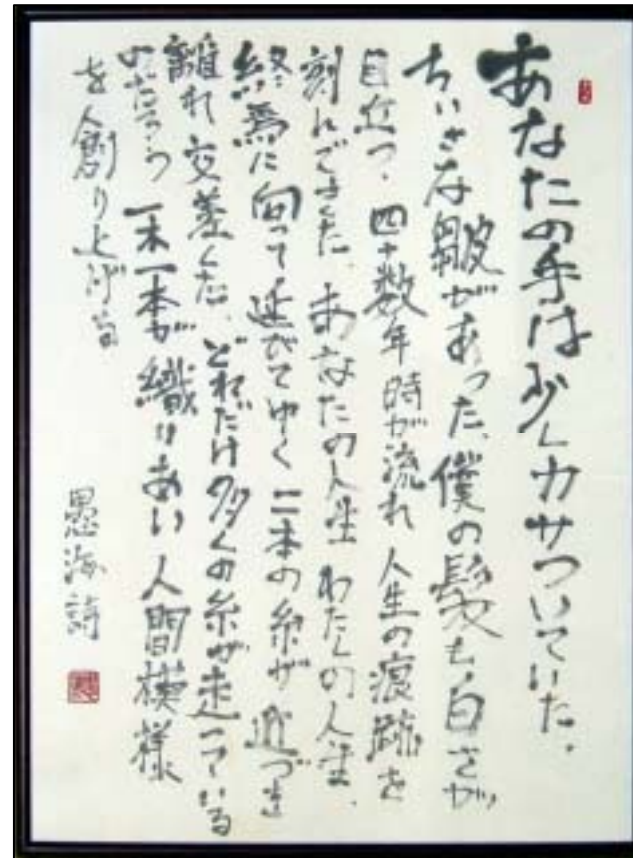
今ではどんなに腹が減っていても、まずい物はまずい。タマムにたつて、むかしの「フア」はお口様の下で、虫ほこくって食ってたりしたんだから、タマムもうまかった。

などと、タマムのせいでする。そのへせ、体重は若い頃より十五キロも増えていたりするのだ。

あ、ばかものよ。 川崎洋

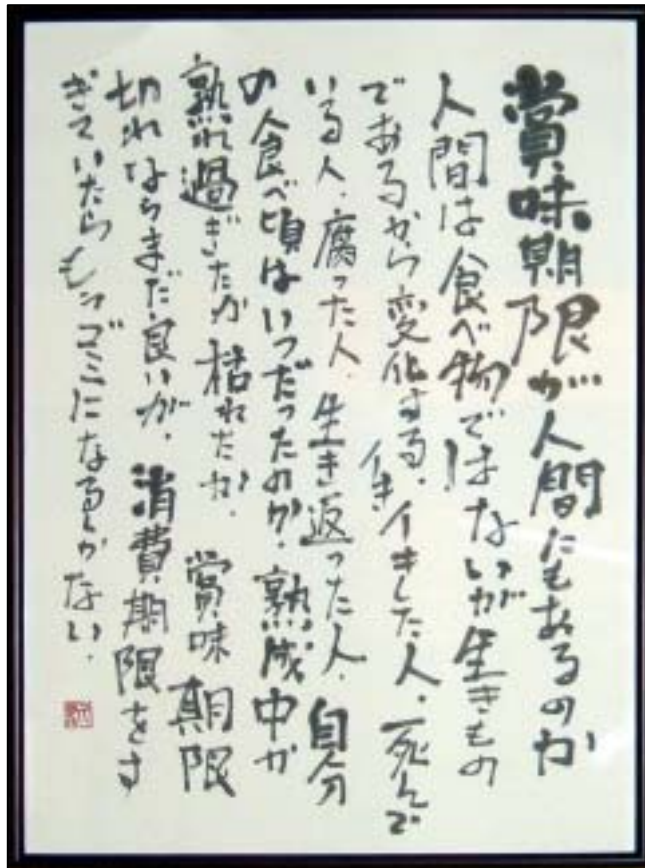
## 自作の詩

“自分の詩を作る、自筆で書く、そして読むと、もっと深く人に伝わる”  
との前回展での励ましを受けて、おそろおそろ始めてみました。  
脳裏に浮かんだことを書く連ねた拙文の寄り集めです。まさに手記ですが、  
なにか想いは書き留められたかなと...



「あなたの手は」

これまでさまざまな人との出会いがあります。  
小さな変化に気付き、そして自らの老いも感じ始め、  
歳月の流れを振り返ってみます。  
いつもそばで支えてくれた人、遠くから見守ってくれた方々がいて、  
自分が生かされていたのです。



「賞味期限」

時々変なことを考える。  
「生身の人間...」というが、なかなかナマな生き方は難しい。  
覆いをかぶり、本音は言わず、周りに気遣い、みんな平均化になってゆく。  
せっかくのお刺身が蒲鉾になってしまったようだ。



## 青春の詩

サミュエル・ウルマン

岡田 義夫訳

青春とは人生の或る期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。  
優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、  
安易を振り捨てたる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。  
年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。  
歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。  
苦悶や、狐疑や、不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年  
月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。  
年は七十であろうと、十六であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。  
曰く驚異への愛慕心、空にきらめく星辰、その輝きにも似たる  
事物や思想に対する欽仰、事に処する剛毅な挑戦、小児の如く  
求めて止まぬ探求心、人生への歡喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

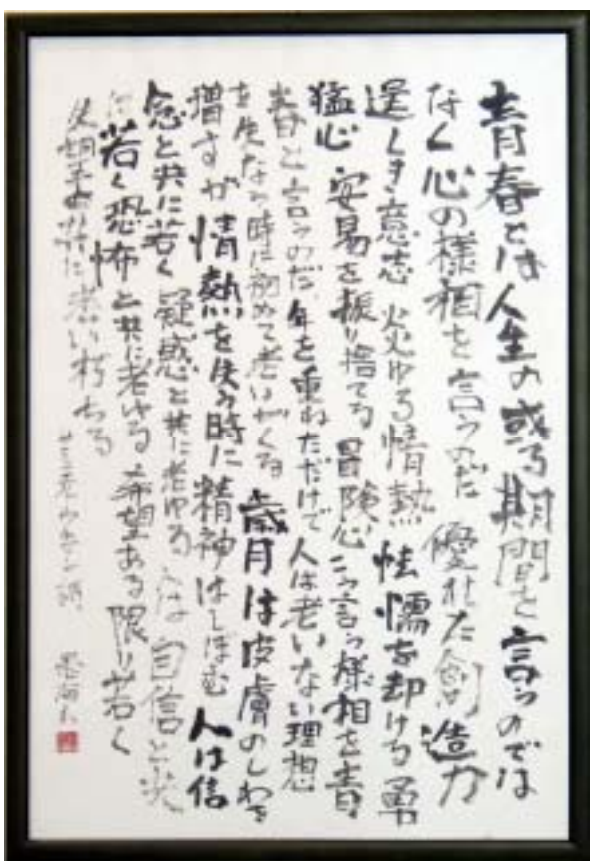
大地より、神より、人より、美と喜悅、勇氣と壮大、そして

偉力の靈感を受ける限り人の若さは失われぬ。

これらの靈感が絶え、悲嘆の白雪が人の心の奥までも蔽いつくし、

皮肉の厚氷がこれを固くとぎすに至れば、この時にこそ

人は全くに老いて神の憐れみを乞うる他はなくなる。



サミュエル・ウルマン 「青春の詩」

## 敗者の冠

自己に絶望する人  
悲しむなかれ  
み親の愛とみ業は  
その人にこそ現われる

欠点だらけの人は幸いである。  
この世的に恵まれない人は幸いである。  
人生の落伍者は幸いである。  
何の取柄もなく、いつも人の後に立たされている人は幸いである。  
貧しい人は幸いである。  
病気がちの人は幸いである。  
泥棒に全財産を盗まれた人は幸いである。  
事業に失敗し、家族から見離された人は幸いである。  
家を失った人は幸いである。  
人から蔑まれつまはじきされる人は幸いである。  
誤解される人は幸いである。  
困難や悲しみに会う人は幸いである。  
無能無力な人は幸いである。  
老いて捨てられた人は幸いである。

見よ、敗者の冠は彼らの上に輝く。  
内なるみ親が真に愛するのは、これらの人々である。

「聖霊の書」 天よりの慰めと励まし

京都北山修道院主 日向 美則著



日向美則著 「敗者の冠」



「性」



「独楽」

生きて死ぬ智慧

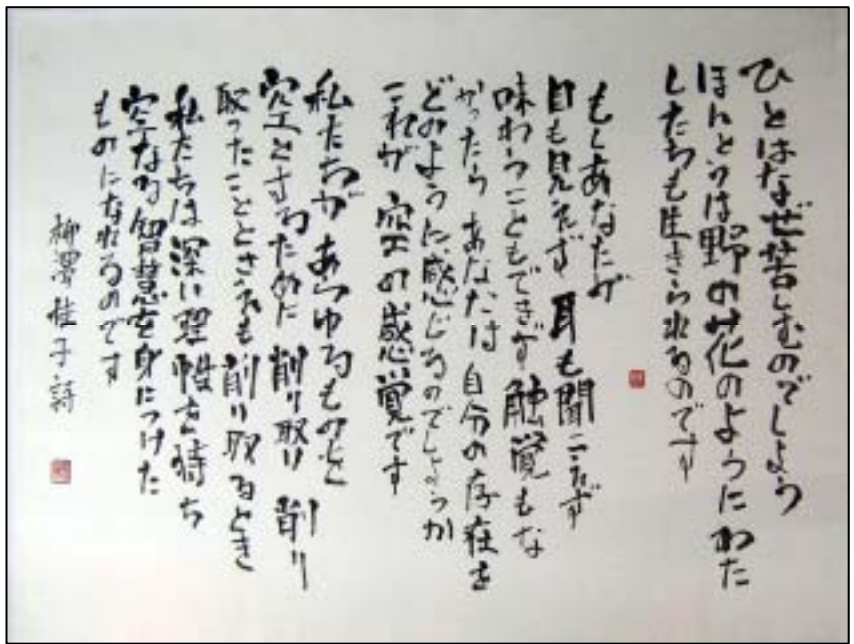
柳澤 桂子

ひとはなぜ  
苦しむのでしょうか……  
ほんとうは  
野の花のように  
わたしたちも  
生きられるのです

もし あなたが  
目も見えず  
耳も聞こえず  
味わうこともできず  
触覚もなかったら  
あなたは 自分の存在を  
どのように感じるのでしょうか  
これが「空」に感覚です

私たちが あらゆるものを  
「空」とするために 削り取り  
削り取ったことさえも削り取るとき  
私たちは深い理性を持ち  
「空」なる智慧を身につけたものになれるのです

生きるという悲しいことをわれはする草木も鳥も虫もするなり



柳澤桂子著 「生きて死ぬ智慧」



### 第3回 植田久男書展 御礼

第三回個展には、ご多忙中にもかかわらず、遠路そして猛暑の中をご来場いただき、誠にありがとうございました。

自然に囲まれた民家ギャラリーでの展示でしたので、柔らかな和室と書とが調和しているとお声もありました。ゆっくりと歓談できましたことが何より嬉しい限りです。

俄か作りの書作ながら熱心にやること、未熟でも自分の言葉も持つことの大切さを感じております。会期中皆様から賜りましたご教示や励ましを糧として、次回展に向け研鑽を重ねてまいります。今後ともご指導の程よろしくお願いいたします。

末筆ながら皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

平成十八年八月吉日 植田 久男（愚海）



アトリエ 〒310-0836  
茨城県水戸市元吉田町789-4  
029 246 0461

E-meil : [gukai369@yahoo.co.jp](mailto:gukai369@yahoo.co.jp)  
ホームページ : <http://220.6.36.80/~gukai/>



水郡線を望む

Antique + Cafe

緑隠雪村庵

〒319-2131

茨城県常陸大宮市下村田片根204-2

TEL/FAX 0295-52-6800